

すっかんぽ

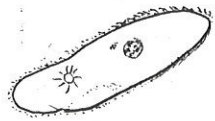
5月号

特集、身近な生き物

その1. 微生物

顕微鏡を使って、一滴の水をのぞいてみると、微生物たちの世界が広がる。ほうておけぼ、煮沸してしまうような、はかない命だ。しかし人間だって地球という一滴の宇宙のしずくの生命体である。我々が生きているように、微生物の世界にも自然の法則が息づいている。そんなことに目を向けるのが、生物という学問なのだ。ところで授業でみえたものをもう一度整理しておこう。

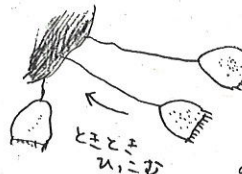
Entry no.1. ソウリムシ



↑
上からみると、広べた
いようにみえるが
実は円柱のような
形をしている。

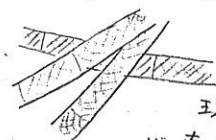
いかに古くさいネーミングだが、欧米でもスリッパムシという意味の名前がついている。また、ソウリムシにもたくさん種類がいて、葉緑体をもったミドリソウリムシというのもある。また、ソウリムシには、一生が10種類以上あり、自分以外の一生をなす子孫を残すことができる。人間のように入と入と入という入の性になったのは、進化の妙であらう。

Entry No.2 ツリガネムシ



↑
ちょっとひょうきんな人な者。ひもみたいなものを先に金垂をつるしたようにぶらさがっている。そして、そのヒモは、一瞬のうちに収縮する。そのヒモがなぜ、ちぎまるのかを研究している人っている。授業でみたツリガネムシは、三毛山(ミカモヤマ)のサンショウウオの産卵地の水から、繁殖させたもの。

Entry No.4 アオミドロ(緑リウ)



↑
植物なので動きがなく、みえておもしろい。現在の陸上植物が存在するのは、大昔の緑リウ類のおかげである。そして、陸上植物のおかげでO₂ができた我々は生きていられる。

Entry no.3 ヒルガタムシ



↑
水道の水たまりの青い藻の中にすんでいる。口のまわりの繊毛を回転させて水流をおこし、小さなソウ類も口の中に入れる。なんだが、バチンコの玉の動きを連想させる。

・微生物は最も身近な生き物のはずだが、案外、ねえ、微生物を繁殖させるには、ちょっとしたテクがある。ソウリムシをふやすには、ワヤワヤはしを10分ほど煮沸し、その液の中にソウリムシを入れてやる。たまに水をかえてやると数年間も飼うことができる。しかし、ソウリムシをかうアホがどこにいる! それが何といるのだ。(私ではない) 教材などをあつかっている業者だ。最近、生物に関係したいろんな物を売っている。(一種の通信販売のよ) そこで問題! 次の生き物のねだんは? How much! (販売のよなもの)

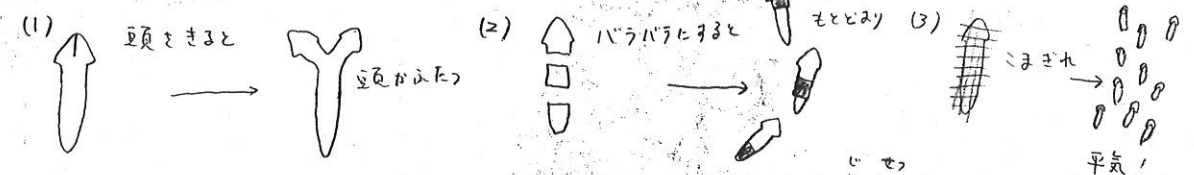
1. ソウリムシ (200cc, 1ビン)
2. ミジンコ (")
3. アオミドロ (20cc, 1ビン)
4. イモリ (10匹き)
5. ヒトデ (5匹き)
6. カエル (1つがい)
7. フラナリア (20匹き)

その2. フラナリア



↑
この生物を知っている人は、かなりの通とみた! 生物部に入る資格あり。それは、こんな形をしている。何、毎日みてるって? 君は大きな感じがしている。このフラナリアというヤツは、このあたりでいうと佐野市内を流れる秋山川の上流の水がきれいなところにすんでいる。流れが少しよどんでいるところの大きな石をひっくり返すと、石の裏に、ちょうどヒルミタいにひっついてる。5月の連休中、秋山川のかなり上流まで行って、何匹か、つかまえてきて、今は、冷蔵庫の中でかっている。

↑
ところで、こいつには、ものすごい特技がある。切っても切ってもまたはえてくるつまり再生力バツグンなんだ。しかも、トカゲのしっぽがまたはえてくるどころの誇りだけでなく、こま切れにしてもその破片から、もとどおりに、なってしまう。たとえば、



↑
こんなすごいヤツもいるのだ。こいつは、自然の状態では自切をして自分でちゃんぎて2つにふえたりもしている。そこで問題! ★ 豆頭をたくさんつくるには、どうしたらよいか。